川崎医療福祉学会誌　Vol. 22　No. 1　2012　79 − 86

原　著

双子の母親の育児ストレスに関する研究
―乳児期の双子育児をする母親の体験から―

村上淳子[*1]　中新美保子[*2]　鈴井江三子[*3]

要　　約

双子を育てる母親の負担は大きく，虐待発生率が一般の8～10倍であることも報告されている．本研究は双子の母親10人を対象に半構成面接を実施し，育児ストレスと今後の支援のあり方を明らかにした．出産～4か月までの育児ストレスは，【双子育児に対する指導への戸惑い】【睡眠・休息の不足】【双子への授乳の困難さ】【双子育児への負担】【双子を連れての外出の困難さ】【ソーシャルサポートの不充分さ】【発達への不安】【上の子に十分対応できない申し訳なさ】が抽出された．5か月～12か月では，【思い通りにならない双子育児の負担】【離乳食への負担】【自分の時間の確保困難】が追加された．児の定頸という成長・発達に伴う育児の変化が育児ストレスに影響していることから，定頸までの支援の重要性が示唆された．助産師は，母親が負担を軽減できる双子育児の実践的な指導と退院後に確実に地域支援が受けられる橋渡しを行うことが早急な課題といえる．

1．緒言

現在，年間に出産する母親の100人に1人が多胎児の母親であると言われている．多胎児のなかでも大部分を占める双子の出産率は1987年以降上昇しており，この増加は不妊治療の普及に関連していると指摘されている[1)]．これを受けて日本産科婦人科学会では，多胎妊娠のリスクを回避する意味から移植胚数を制限し，2005年をピークに双子の出産率は減少傾向であるが，依然高い数値を示しているといえる．

双子の妊娠・出産は，妊娠合併症の罹患率の上昇や低出生体重児の増加など，単胎妊娠に比べて母児の健康問題に与える影響は大きく，周産期医療の新たな問題を発生させていることは周知の事実である．また，出産後の育児についても，単胎児の母親に比べ双子の母親の睡眠や自由時間は少なく，育児や授乳に費やす時間が長いこと[2,3)]，精神健康状態が悪化していること[4)]，地域での保健指導や育児指導に不満足な者が多いこと[5)]は明らかであり，身体的・精神的に母体の負担は大きい[2-18)]といえる．また，経済的にも負担が大きいこと[10,14)]も報告されている．しかしながら，これまで多胎児家庭に対する支援策は十分検討されているとは言い難く，専門家でさえも多胎児家庭への対応に苦慮している[14)]と横山は述べている．さらに，双子の母親は「子どもを虐待しているのでは」と感じる割合が単胎児の母親に比べて多く[19)]，虐待発生率が一般の8～10倍であること[20)]，また虐待による死亡事例では0歳児が多く，主たる加害者は実母が最も多いこと[21)]も報告されている．しかし，これまでの研究は乳幼児期の双子に焦点をあてたものが多く，授乳などの育児負担の大きい乳児期の双子の母親特有の育児上の体験やその思い，不安内容などを詳細に段階を追って明らかにしたものは少ない．支援者がこの時期の母親のストレスを十分に理解し，適切な時期に求められる事柄に対する育児支援を行うことによって，双子育児支援の質の向上と確保，長期的には虐待予防にもつながると考えられる．

そこで，本研究は乳児期の双子の母親の育児ストレスの内容を明らかにし，双子育児の支援の在り方について示唆を得ることを目的とした．

*1 倉敷成人病センター　*2 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　保健看護学科　*3 兵庫医療大学　看護学部　看護学科
（連絡先）中新美保子　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-Mail：nakanii@mw.kawasaki-m.ac.jp

2．研究方法

2．1　デザイン

本研究は，質的帰納的研究である．

2．2　研究参加者

生後2歳未満の双子を養育中の，中国地方2県に在住する母親10人とした．研究参加者を2歳未満の双子を養育している母親としたのは，乳児期の双子の母親の育児ストレスを抽出する為，記憶の鮮明な時期を考慮して選定したためである．

2．3　データ収集方法

研究参加者に，半構成的面接ガイドに基づきインタビューを実施した．内容は研究参加者の了解を得てからＩＣレコーダーに録音した．主な質問内容は，①母親の属性②児の属性③育児の背景④妊娠中のことや，出産後（入院中）に関すること⑤出産後の生活についてである．データ収集期間は2011年4月から2011年8月であった．

2．4　データ分析方法

内容分析の手法を用いて質的帰納的に行った．データは逐語録とし，数回にわたり読み返した．次いで，意味のまとまり毎にコード化し，分析基礎表を作成した．そして，コードの意味内容の同質性，異質性に基づき分類・集約し，抽象度を上げて表現し，サブカテゴリーとした．さらに，これを繰り返し，カテゴリーとした．そして，カテゴリー毎に共通するものと特徴的なものを納得するまで討論し，母親の語りの特徴を明らかにした．

2．5　信頼性・妥当性の確保

データの信頼性を確保するために，常にデータに立ち返りながら分析を行った．また，データの妥当性を高めるために，質的研究に精通した母子領域の大学教員2人および修士課程にあり質的研究を行っている大学院生3人（双子の母親を含む）で納得するまで検討を行った．

2．6　用語の定義

育児ストレスとは，双子の母親が育児をする中で，母親自身に関連したもの・子ども自身に関連したもの・養育環境に関連したものが要因となり，否定的感情を抱くことや，その結果母親が経験する困難な状態．

2．7　倫理的配慮

本研究は，川崎医療福祉大学倫理委員会による審査及び承認を得た（承認番号234）．研究参加者には，本調査の趣旨を文書を用いて説明後，同意書にサインを得た．面接の日時や場所は，研究参加者に負担をかけないように，研究参加者の意向に沿い，プライバシーの守れる場所を相談の上決定し実施した．依頼書には，得られたデータは研究目的以外で使用することはないこと，個人情報は，個人が特定できないように記号化し，第三者にはわからないように配慮すること，研究協力を拒否しても不利益を被ることが無いことなどを明記した．

3．結果

3．1　研究参加者の概要

研究参加者の年齢は20代後半が3人，30代前半が4人，30代後半が3人であった．初経産別では，初産婦4人，経産婦6人であった．インタビュー時の児の月齢は，4か月から2歳であった．在胎週数は，34週から39週であった．出生体重は，2500g未満であった者は，20人中13人であった．

3．2　育児ストレスのカテゴリー

インタビューガイドに基づき1～2か月おきに育児ストレスの抽出を試みたが，児の定頸前後での母親の語りに違いがみられた為，定頸を境にストレスの内容が変わると推測できた．よって，育児ストレスの抽出は出産～4か月と5か月～12か月に区分して行った．本文中にある記号は，【　】はカテゴリー，＜　＞はサブカテゴリーを意味する．対象者が語った言葉は太字で記載した．

3．2．1　出産～4か月までの育児ストレス（表1）

出産～4か月の双子の母親の育児ストレスは，24サブカテゴリー，8カテゴリーが抽出された．

（1）【双子育児に対する指導への戸惑い】

【双子育児に対する指導への戸惑い】は，＜場所（病院）による授乳指導への困惑＞＜双子の授乳技術指導への戸惑い＞＜医療職者の不用意な発達の指導へのいらだち＞で構成されていた．「**看護師さんが『双子だから1人ずつあげてたら，24時間授乳することになるわよ』って，・・・でもB（産褥入院施設）に行くと，『いやいや2人母乳でしょ』って**」や「**『同時授乳の仕方を知りたいんですけど』って言ったけど，『（1人ずつ）抱っこしてあげてくださいって』**」など，母親が産褥入院中に助産師や看護師からの指導に対して，戸惑いや苛立ちを感じていたことなどが語られていた．

（2）【睡眠・休息の不足】

【睡眠・休息の不足】は，＜双子のリズムの違いによる睡眠の不足＞＜双子のリズムの違いによる昼間の休息の不足＞で構成されていた．「**1人おっぱい終わって，やっと寝たと思ったら，次が起きるって感じで**」と，双子の育児に追われ，睡眠・休息をとることが出来ず，疲労していた体験であった．また，昼間も常に双子のどちらか一方の世話に追われ，ゆっくり休息をとることができないと感じていることも語っていた．

表１　出産～4か月までの育児ストレス

サブカテゴリー	カテゴリー
場所（病院）による授乳指導への困惑	双子育児に対する指導への戸惑い
双子の授乳技術指導への戸惑い	
医療職者の不用意な発達の指導へのいらだち	
双子のリズムの違いによる睡眠の不足	睡眠・休息の不足
双子のリズムの違いによる昼間の休息の不足	
同時授乳の困難さ	双子への授乳の困難さ
うまくいかない授乳の難しさ	
思うような母乳育児ができない辛さ	
低出生児であるための授乳の難しさ	
１人で双子の世話をできるのかという不安	双子育児への負担
１人で双子の世話をする身体的負担	
双子の泣きに対する対応の困難さ	
双子に平等に対応してあげられない申し訳なさ	
外出できないことの辛さ	双子を連れての外出の困難さ
双子を連れての外出の負担	
双子を連れての外出への不安	
身内のサポートの不足	ソーシャルサポートの不充分さ
情報の不足	
外部サポートの不足	
身内のサポートへの気兼ね	
外部サポートへの抵抗感	
一度に多額のお金がいるという経済的負担	
正常な発達が可能かという不安	発達への不安
上の子に十分対応できない申し訳なさ	上の子に十分対応できない申し訳なさ

(3)【双子への授乳の困難さ】

【双子への授乳の困難さ】は，＜同時授乳の困難さ＞＜うまくいかない授乳の難しさ＞＜思うような母乳育児ができない辛さ＞＜低出生体重児であるための授乳の難しさ＞で構成されていた．「**2人同時に授乳するのに，まだ首がすわってなかったんで，私1人では怖かった**」や「**実家に帰ったら帰ったで，みんながミルクをやろうとしてくれて余計に，（お乳を）くわえさせることもできなくなっちゃって**」や「**入院の間はたぶん哺乳瓶で飲んでたから，乳首から飲まなくて**」など，初めて行う双子への授乳に対するさまざまな困難な思いを語っていた．

(4)【双子育児への負担】

【双子育児への負担】は，＜1人で双子の世話をできるのかという不安＞＜1人で双子の世話をする身体的負担＞＜双子の泣きに対する対応の困難さ＞＜双子に平等に対応してあげられない申し訳なさ＞で構成されていた．「**病院では，ほんと1人の子に慣れるので精いっぱいで・・・夜も寝れず，ぼろぼろになりながら退院して**」や「**もう声かけるのも忘れてひたすら抱っこしてました**」や「**自分に余裕がないときには，2人同時に泣かれると，もうイラッときて，部屋を私でます**」など，初めての双子の育児に対し抱く不安に加え身体的な負担や，精神的に追い詰められていた語りであった．また，双子を同じように抱っこしてあげられないことに自責の念を感じている語りもあった．

(5)【双子を連れての外出の困難さ】

【双子を連れての外出の困難さ】は，＜外出できないことの辛さ＞＜双子を連れての外出の負担＞＜双子を連れての外出への不安＞で構成されていた．「**まず（2人を同時に）抱っこできない，私は首がすわってないと怖くて**」や「**出てみたい気もするけど（私）1人だと，2人がぐずった時とか（大**

変），体が1個しかないからどうにもできん，誰にも助けてもらえん」など，定頸前の2人を1人で連れて出ることへの怖さや不安と，双子を連れて外出することの身体的負担感を語っていた．

（6）【ソーシャルサポートの不充分さ】

【ソーシャルサポートの不充分さ】は，＜身内のサポートの不足＞＜情報の不足＞＜外部サポートの不足＞＜身内のサポートへの気兼ね＞＜外部サポートへの抵抗感＞＜一度に多額のお金がいるという経済的負担＞で構成されていた．夫の帰宅が遅い，実家が遠方で協力を得られないなど身内サポートの不足や，「**病院は，双子サークルを尋ねても『わからない』って**」など情報の不足や，「**上の子だけでも保育園に4月から預かってもらえるように（申請書類を）提出したんですけど，結局，（私が）家にいるからってことで預かってもらえなくて**」など外部サポートの不足という外的要因と，「**ちょっと頼みたいなという時はありますけど，初めての方にお願いしますという気には，ちょっとなれない**」と母親自身の抵抗感や気兼ねという内的要因が混在した語りもあった．

（7）【発達への不安】

【発達への不安】は，＜正常な発達が可能かという不安＞で構成されていた．「**最近の子（単胎児）は，もう3ヶ月くらいでも首がしっかりしてますよね**」など，早産である双子の発達に関した不安を語っていた．また，双子1人ひとりの発達の違を不安に感じる語りもあった．

（8）【上の子に十分対応できない申し訳なさ】

【上の子に十分対応できない申し訳なさ】は，＜上の子に十分対応できない申し訳なさ＞で構成されていた．「**こうイライラしてくると，お姉ちゃんにあたってしまうんですよね**」と，双子の育児に追われ上の子に十分対応できないことや，上の子が思うように動いてくれないことにイライラを感じていたと語った．

3．2．2　5か月～12か月までの育児ストレス（表2）

この時期の育児ストレスは，11サブカテゴリー，7カテゴリーが抽出された．【発達への不安】【上の子に十分対応できない申し訳なさ】に関しては，乳児期通しての育児ストレスとして抽出された為ここでは省略する．

（1）【思い通りにならない双子育児の負担】

【思い通りにならない双子育児の負担】は，＜思い通りにならない双子の行動への苛立ち＞＜双子から離れられない負担感＞で構成されていた．「**とにかく（双子が）いる時間帯は何もできなかったですよねー，で，（私が）いなくなると泣くんですよね**」など，児の発達により2人の乳児の行動に，母親自身が制限されていると語っていた．

（2）【双子を連れての外出の困難さ】

【双子を連れての外出の困難さ】は，＜双子を連れての外出の困難さ＞で構成されていた．「**買い物っていってもあんまりいっぱい買えないじゃないですか，ベビーカーにはかごはおけない**」など，母親が1人で双子を連れて外出することの大変さや，短時間の外出にも双子の用意に時間がかかり大変だったことを語っていた．

（3）【ソーシャルサポートの不充分さ】

【ソーシャルサポートの不充分さ】は，＜不測の事態時のサポート不足＞＜外部サポートの利用の難しさ＞＜一度に多額のお金がいるという経済的負担＞で構成されていた．自分の体調不良時の子守り

表2　5か月～12か月までの育児ストレス

サブカテゴリー	カテゴリー
思い通りにならない双子の行動への苛立ち	思い通りにならない双子育児の負担
双子から離れられない負担感	
双子を連れての外出の困難	双子を連れての外出の困難さ
不測の事態時のサポート不足	ソーシャルサポートの不充分さ
外部サポートの利用の難しさ	
一度に多額のお金がいるという経済的負担	
離乳食自体に対する負担	離乳食への負担
2人の離乳食に1人で対応すること	
自分の時間の確保困難	自分の時間の確保困難
正常な発達が可能かという不安	発達の不安
上の子に十分対応できない申し訳なさ	上の子に十分対応できない申し訳なさ

の不在などや，「**一時保育にしても，電話した段階で，預かってもらえないって．子育てしてたら，急にってことがいっぱいじゃないですか**」など外部サポートの利用の難しさや，4か月まで同様に経済的負担について語っていた．

(4)【離乳食への負担】

【離乳食への負担】は，＜離乳食自体に対する負担＞＜2人の離乳食に1人で対応すること＞で構成されていた．「**ベビーフードとか使うのが，抵抗があって全部手作りしてるんですけど，やっぱり時間がかかるので，（2人）ぐずりながら見ながら**」や，母親1人で双子1人ずつに食べさせることの時間的負担感も語っていた．

(5)【自分の時間の確保困難】

【自分の時間の確保困難】は，＜自分の時間の確保困難＞で構成されていた．「**やっぱり，ほんとの自分の時間，1人になりたいんです**」と，双子の育児に追われ自分1人の余暇の時間を自由にとれないことによる疲労感を語っていた．

4．考察

4．1　児の定頸と育児ストレス

今回の調査では母親の語りから，児の定頸という成長・発達に伴う育児の変化が母親の育児ストレスの内容に影響していることが読み取れた．一般的に母親の育児行動を考えると，児の定頸までは片手で児の頭部と頸部を支え，もう一方の手で体を支える必要があるため，2人の子どもを同時に抱くことは難しい．また，その状態で2人に同時に授乳することは，特別な手法を習得しないかぎり不可能である．嶋松ら[11]は，乳児期の双子の母親が抱えている問題は，授乳の難しさであったと報告しており，本調査でも【双子への授乳の困難さ】が抽出され，母親にとって育児ストレスとなっていたことがわかる．また【双子を連れての外出の困難さ】についても，児が定頸していない期間は＜双子を連れての外出への不安＞という精神的な負担が特に大きかったことが理解できた．このことより，児の定頸は母親の育児ストレスに影響を与える重要な出来事であったことが明らかとなった．

エリクソンの自我発達理論によると，乳児期固有の課題は，人間に対する基本的信頼感を獲得し，不信感を克服することである[22]と述べている．これは母性的役割を持つ他者からその子どものニードを満たす安定した養育を提供されることによって達成される．しかし，なんらかの理由で子どものニードを適切に満たすことができず，その子どもとの間の人間的な関係を拒否し続けるようなことがあれば，次の段階の健全な発達は生じない．つまり，育児困難や不安という育児ストレスが長期にわたり持続すれば，児への愛着形成に支障をきたし，その後の児の健全な発達にも影響を及ぼすことになると考えられる．このことから，まず児の定頸までの時期が双子家庭の支援や寄り添いの最も必要な時期であり，今後の育児支援策の重要な視点になると示唆された．

4．2　出産～4か月までの育児ストレスと支援について

この時期の双子の母親の育児ストレスの中に【双子育児に対する指導への戸惑い】が抽出されたことは，医療職者として重く受け止める必要がある．育児のスタートを切る場としての，産褥入院中は母親にとって重要な場である．また，そこでの助産師による育児指導の果たす役割は大きいといってよい．退院後1か月の母親の育児体験から，入院中に予測できなかった出来事やイメージ出来なかった育児に対し，母親は育児の大変さを高めていた[12]とする報告があるように，本研究の結果からも，産褥入院中の育児指導の不足が出産～4か月までの母親の育児ストレスに影響を及ぼすと考えられた．【双子を連れての外出の困難さ】を感じる児の定頸前は，有効な情報が得にくく，その中で初めての双子育児に取り組む母親の育児ストレスは計り知れない．また，分娩後は一度に2人の母親になった緊張感から，母親は2人分の育児を平等にしなければいけない，という気持ちになりがちで，一回の授乳に一時間以上もかかることがある[23]と言われているように，本調査でも，【双子への授乳の困難さ】が抽出され，退院指導時の個別的かつ具体的な授乳指導は重要であると考えられた．

そのため，母親に最初にかかわる専門職である助産師には，様々な対象者に適応できる知識・技術の向上を図り適切に指導出来ることが求められる．助産師会等の研修会を利用した教育や，地域との情報交換により支援体制を把握し，地域産褥入院施設の活用を母親に勧めることもこの時期の支援としては有効であると考える．また，育児中の母親とのカンファレンス等を企画し，日々変化する社会の中におかれている母親の育児ストレスに積極的に関わりながら，助産師が支援できる内容を考えて行く必要がある．

4．3　5か月～12か月までの育児ストレスと支援について

この時期は，児の定頸により母親にとって児への対応は容易になるが，はいはい，つかまり立ち，ひとり歩きと，児の成長・発達はめざましく，母親1

人では同時に2人の子どもに目が行き届かなくなり【思い通りにならない双子育児の負担】を感じていた．また，【離乳食への負担】も加わり，単胎児の場合の2倍近い時間と体力が要求されることになる．このストレスは，子どもの成長に伴うものであり，この成長を取り除くことは不可能であり，母親はこの成長を楽しみながら頑張っていることは容易に理解できる．しかし，時にこのストレスが限界に来る時，子どもに手が出て，虐待に進む可能性を秘めていることが危惧される．大木ら[19]は，母親を虐待へ向かわせるのは発達に遅れのある『育てにくい子』よりもむしろ，疲労や育児不安といった『子育てストレス』が大きく影響していると述べている．本研究でも，【自分の時間の確保困難】が母親の疲労を蓄積させ，ストレスとなっていた．

よってこの時期の支援としては，児の育児だけに目を向けるのではなく，育児をする母親に目を向け，母親の自由な余暇の時間をつくるための支援が必要であると考えられた．現在，こども未来財団による「双生児等多胎児家庭・産前産後休業時育児支援事業」という育児補助券事業や，国による一般的な子ども・子育て支援として「地域子育て支援拠点事業」等，子育てにかかる経済的負担の軽減や安心して子育てができる環境整備が活発に進められている．しかしながら，【ソーシャルサポートの不充分さ】が抽出されたことからもわかるように，母親が有効に活用できているとは言えない．また，自分の為に利用することにためらう母親の一面も見られた．日本では，「良妻賢母」という夫と子どもの為だけに自分の時間を費やすことが，よい母親像のように言われていた時代があった．しかし，現代の母親は子育て期にあっても，同時に生きがいや自己実現（自己表現や社会参加など）の時間を持ちたいという意識が強いと山下[24]は報告している．現代の母親が1人の女性として，妻として，母親として，それぞれの時間を持つことができ，またその時間を持つことが育児においても必要だと思えるようにサポートしていくことが，この時期の育児支援のカギとなると考える．

4．4　助産師としての双子育児支援

乳児期の双子の母親への支援として，助産師は専門性を十分発揮し育児のスタートを切る場としての産褥入院期間中に，1歳までの時期を長期的に見据えた育児指導を行っていくことが求められている．児が定頸するまでの4か月間の母親の大変さに対しては，母親が負担を軽減できる育児の工夫について個々の家庭の個別性を反映させた指導が必要である．また，どの時期にどんなストレスが起こりやすいのかをパンフレット等で具体的に示すなど，母親が少しでも先を見通せるような指導や，退院後も母親を長期的に支援できるような地域への確実な橋渡しを行っていくことが早急な課題といえる．

調査を行ったのは中国地方の2県であったが，母親は自分の時間が確保できないことを育児ストレスとして捉えていた．都心部だけではなく地方であっても，欧米化した日本の女性の育児を支える視点が重要であることが示唆されていると考える．助産師が退院指導時に一言，自分の時間を確保することを肯定することで，母親は楽に育児に取り組めるのではないかと考える．

5．研究の限界と今後の課題

本研究の限界として，時間の経過とともに変化していくストレスを後方視的に研究したため，その時期の明確な育児ストレスが引き出せているとは言い切れない．また，中国地方2県の母親という地域的偏りが存在していること，10人という少人数のデータであることから，今後は，前方視的な研究を行い，この時期の母親の育児ストレスを明確にしていくことが必要と考えている．

謝　辞

本研究をまとめるにあたり，ご協力いただきましたお母様方に深く感謝申し上げます．

本研究は川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科保健看護学専攻修士課程の論文に一部加筆・修正したものである．

文　　献

1）今泉洋子，末原則幸：多胎（児）に関する基礎知識．横山美江編，双子・三つ子・四つ子・五つ子の母子保健と育児指導のてびき，第1版第1刷，医歯薬出版，東京，1－10，2000.

2）北岡英子，杉原一昭：双子育児の実態と育児支援に関する研究（第1報）－双子と単胎児の母親の比較を中心にして－．小児保健研究，**61**(5)，661－668，2002.

3）西村真実子，津田朗子，林千寿子，木村留美子，関秀俊，飯田芳枝，松本美紀，伴真由美：石川県における乳幼児の育児の実態と母親の意識　多胎児と単胎児の場合の比較．小児保健研究，**59**(6)，680－687，2000.

4）服部律子：双子の母親の精神健康度に関与する要因の分析．母性衛生，**48**(1)，142－151，2007.

5）服部律子，堀内寛子，兼子真理子：双子の母親の健康状態と保健指導の課題．岐阜県母性衛生学会雑誌，**33**，33－38，2005.

6）遠藤智子：乳児期の双子の母親が沐浴・入浴時に行っている工夫．日本看護学会論文集（地域看護），**39**，57－59，2009.

7）加藤志保，緒方京，高橋弘子：さまざまな人と母親の工夫で支えられた双子の育児．愛知母性衛生学会誌，**24**，57－63，2006.

8）上川友美，小林康江：双子を持つ母親が行なっている育児に関する研究．山梨県母性衛生学会誌，**4**(1)，21－27，2005.

9）藤原由美子，藤原由美，須山由梨子：多胎児をもつ母親の育児に関する産前・産後の悩み事　子育て中の母親の意見から．日本看護学会論文集（母性看護），**35**，137－139，2004.

10）尾前沙織，谷尚子，安代晋吾，木下さわ美，中尾雅美，太田小百合，野村公寿：双生児を育てる母親の生活実態の検討．藍野学院紀要，**19**，60－66，2005.

11）嶋松陽子，高山知美：双子を養育する母親の育児困難感とその要因．保健科学研究誌，**1**，35－42，2004.

12）藤井美穂子：双子を持つ母親の退院後1ヵ月間の育児体験．日本助産学会誌，**21**(2)，77－86，2007.

13）横山美江，清水忠彦：多胎児に対する母親の愛着感情の偏りと関連要因の分析．日本公衆衛生雑誌，**48**(2)，85－94，2001.

14）横山美江，中原好子，松原砂登美，杉本昌子，小山初美，光辻烈馬：多胎児をもつ母親のニーズに関する調査研究　単胎児の母親との比較分析．日本公衆衛生雑誌，**51**(2)，94－102，2004.

15）大木秀一，志村恵：乳幼児健診に対する多胎児の母親の意識調査．北陸公衆衛生学会誌，**36**(1)，25－29，2009.

16）服部律子：双子の母親の育児不安に影響する要因　不妊治療と育児の実態．母性衛生，**48**(1)，38－46，2007.

17）西原玲子，服部律子，小林葉子，早川和生：母親の育児不安と双生児の精神運動発達との関連性の検討―双生児と単胎出生児との比較から―．日本公衆衛生雑誌，**53**(11)，831－841，2006.

18）杉本昌子，横山美江，和田左江子，松原美代子，斎藤美由紀，薗潤：多胎児をもつ母親の不安状態と関連要因についての検討　単胎児の母親との比較分析から．日本公衆衛生雑誌，**55**(4)，213－220，2008.

19）産経ニュース：【何が虐待へ向かわせるのか】．電子資料，
http://sankei.jp.msn.com/affairs/news/110118/crm11011805050062-n2.htm（2011. 8. 25）

20）宮崎日日新聞：多胎育児もっと支援を．電子資料，
http://www.the-miyanichi.co.jp/contents/index.php?itemid=23013&catid=379（2011. 2. 22）

21）子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について：社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会　第5次報告．電子資料，
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv37/dl/01.pdf（2011. 11. 20）

22）舟島なをみ：看護のための人間発達学．第1版第1刷，医学書院，東京，25－26，1995.

23）服部律子：妊娠・産褥期の保健指導．加藤則子編，すぐに役立つ双子・三つ子の保健指導BOOK～これだけは知っておきたい多胎育児のコツと指導のポイント～，第1版第1刷，診断と治療社，東京，94－95，2005.

24）山下由紀夫：母親の子育て意識形成と子育て環境の関係性について　都市近郊地域における母親の意識調査をめぐって．旭川大学女子短期大学部紀要，**41**，41－66，2011.

（平成24年5月8日受理）

Parenting Stress in Mothers of Twins
−Experience of Mothers Parenting Twin Infants−

Junko MURAKAMI, Mihoko NAKANII and Emiko SUZUI

(Accepted May 8, 2012)

Key words：twins, parenting stress

Abstract

Mothers of twins bear a greater parenting burden. It has been reported that the rate of child abuse by them is 8 to 10 times higher than by the general population. This study examined their parenting stress and appropriate support for them through semi-structured interviews with 10 mothers of twins. As a result, the following categories were extracted as forms of parenting stress they experienced after delivery until 4 months: [Confusion caused by twin parenting advice]; [insufficient sleep and rest]; [difficulty in breastfeeding twins]; [a greater burden of parenting twins]; [difficulty in going out with twins]; [insufficient social support]; [anxiety over developmental issues]; and [feeling sorry for insufficient care for elder children]. In addition to these, five to 12 months after delivery, they experienced: [the burden of troublesome twin parenting]; [burden of feeding twins baby food]; and [difficulty in finding time for themselves]. These results suggest the importance of support for these mothers until their twin's necks become stable, as their parenting stress is associated with developmental changes; therefore, it is an urgent issue for midwives to establish a system facilitating the provision of practical twin parenting advice and community support for mothers after discharge.

Correspondence to：Mihoko NAKANII

Department of Nursing
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail：nakanii@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.22, No.1, 2012 79－86)